

大切な人と幸せと

118P200 古居優果里

重松清 『その日のまえに』 文藝春秋，2008年

自分にとって大切な人とは誰だろうか。家族、友人、恋人や恩師が思い浮かぶ人もいるかもしれない。そして、そんな大切な人との出来事を幸せだと実感するのはいつだろうか。それは、人と別れた後ではないだろうか。その人と話したり、ご飯を一緒に食べたり、一緒に暮らしたり…。その時間の最中にはそれが幸せであることは気付かない。その時間が終わり、一人になったふとしたときにその幸せを感じるのではないだろうか。中でも、その人が亡くなったとき、その人との出来事について幸せだったと思いを馳せるのではないだろうか。

本書では、死を迎える「その日」に向かい生きる人と残された人との暮らしが描かれている。人が「その日」を迎えるのは一度しかない。しかし、「その日」を迎える人を見届けることはきっと何度もある。「その日」を迎える人が自分にとって大切な人でないのなら、特別に思いを馳せることはない。本書にて、主人公は「その日」に向かい生きる同級生がいたが、彼女に対し特に思うことはなかった。しかし、彼女が「その日」を迎えたことで、死について考えさせられ、自分にとっては無関心な彼女も、誰かの大切な人であったと感じる。

大切な人が「その日」に向かって生きていくのを目の前で見ていることは、とてもつらい。その人は平気な顔をして接してくるのに、「その日」に向かい少しずつしかし確実に変化している様子が見える。だが、自分には何もできないというやるせない気持ちとその人が「その日」を迎えたときを考え不安に駆られる。しかし、「その日」に向かって生きていく人もつらいのだ。残される人に何をできるだろう、残される人は前を向いて生きていけるのか、など不安の波に襲われる。そこで、向かう者も残される者も、初めて「その日」をリアルに実感し、その人が大切な人であり、それまでの日々の生活が幸せであったと感じる。そのとき、人は、限られた中で当たり前にある大切な人との幸せを、大切に忘れられないように、「その日」に向かい必死に生きていくのだ。

さらに本書では、「その日」のあとも描かれている。残された人がどんなに深く落ち込んでも、日常はいつものようにやってくる。その人宛てのダイレクトメールは届くし、淡々と季節は過ぎていく。そして少しずつ忘れていく。しかし、そんな日常の中で、その人が残したものに触れたとき、その人がいかに大切な人であり自分は幸せであったかを感じることができるのだ。

自分にとって大切な人とは誰なのか、そして幸せとは何か、ぜひ考えてみてほしい。本書を読み終わると、このヒントを教えてくれるに違いない。大切な人の存在や幸せに気付いていない人も、大切な人の存在や幸せについて実感をしている人も、ぜひこの本を読んでほしい。明日からの生活に小さな変化をもたらしてくれるはずだ。